

令和元年度 第2回 会津若松市中小企業・小規模企業未来会議 要旨

日時：令和元年9月4日（水）15：30～17：00

場所：生涯学習総合センター（會津稽古堂）研修室6

●出席者は別紙のとおり

1 開会（司会：観光商工部商工課 馬場主幹）

2 協議

- ・青木准教授が座長となり進行
- ・事務局から個別ヒアリングを行った結果を報告し、協議テーマに「人材の育成・掘り起こし・呼び込み」と「地域の各主体の交流」を設定して協議

（発言要旨）

【市チャレンジ企業応援補助金について】

- ・補助金の趣旨とは異なる事業が多かった印象だ。
- ・地域に還元できる事例となるよう、モニタリングや支援を行っていく必要がある。
- ・経過の追跡や結果の報告は重要である。市民や市内事業者に対して、補助金の成果について透明化を図っていく必要がある。
- ・補助金として採択されなかった事業であっても、その芽を潰さずにブラッシュアップしていけるような取組・支援が求められる。
- ・フォローアップについては、各支援機関のメンバーに振ってもらいながらやっていければ。好循環を創出できるような取組につながることを期待する。

【人材の育成・掘り起こし・呼び込みについて】

- ・創業者向けの支援としては、知識だけではなく、知恵も身に着けられるような取組が必要。やる気はあるが、やり方がわからない人に対する支援が重要だ。
- ・そもそも（やる気のある）人をどう呼び込んでいくのか。外から来られた人に話を聞いてみるのもいいのではないか。会津だからこそできるターゲット戦略は何か。年齢層、業種も様々であろうし、支援の在り方も様々ではないか。
- ・小中から企業家精神の醸成を図っていく必要があるのでは。総合学習の時間などに中小企業の経営者が学校に教えに行くことも可能ではないか。
- ・実際活動している団体や人を巻き込みながら、企業家教育ができると面白いのだが。
- ・普通高校に対する企業家教育が必要ではないか。商業、工業、農業といった専科高校は一定程度そういった機会もあるだろうが、普通高校はそういった機会がない。小学校・中学校までの取組が充実していても、高校での取組が薄れてしまうと……。
- ・大学入試においても、高校生が地域において課題解決する力や協働する能力が評価の対象になろうとしている。
- ・年代やレベル（思い入れ）別の企業家教育・支援が求められていると思う。
- ・生徒のみならず、先生が企業体験することで、企業でどのような人が必要とされているのか知ることにもなる。
- ・市内の普通高校を巻き込めるような未来会議の取組ができれば。先生方だけでは取組はできない。企

業家教育をはじめとした地域ができる取組をパッケージ化した取組を提案できれば。

- ・ 実際教育を受ける高校生の立場にも立って、ニーズや食いつきの良い取組を検討できれば。若い人の視点や思いを忘れがちになってしまうところもあるため、注意したい。
- ・ 高校生といった若い人たちからこれまでとは変わった、別の視点をもらうこともある。固定観念を捨てて取組を検討しないと。高校生の希望を、地元の企業が実現できるような、やりたいことをやらせてあげられるような地域になると良い。
- ・ 夢を持てるようなアイデアや学生の商品開発を地域の企業で出来ることがわかれば。
- ・ 人材育成を通して、地域企業に定着を図ってもらえるような仕組みは作れないか。
- ・ 地域企業と関わることを大学や短大で単位化することはできないか。
- ・ 東北の他大学では、地域貢献活動に協力することを必修化したり、論文のテーマとして「地域社会」を取り上げることを課したりしているところもある。
- ・ 地域貢献活動を必修化すると、意欲のある学生が集まらなくなってしまうこともある。
- ・ 様々なプロジェクトや取組に大学生・高校生（若者）を加えていく工夫が必要か。
- ・ 会津短大としては、地域活性化センターを早くから設立し、先進的な取組として注目されているものの、今はセンターの先生が地域と関わった件数が実績となっている。地域と大学・短大との関わり合いを強化する中で、地元企業との関係性も深めていければ。
- ・ 会津大学では、d.schoolのようなイノベーション人材（0から1を生み出すような人材）の創出に向け、社会人も受講可能な講義メニューを検討している。
- ・ 地域で必要な人材を地域で育てることが重要である。
- ・ 気持ちだけが先立ってしまっただけではいけないが、気持ちがない事業は意味がないし、やりきれない。
- ・ 実際に他から会津に入ってきて事業をやっている人に話を聞く機会があってもいいと思う。なぜこの地域だったのか、どんな環境があってやってみようと思ったのか。
- ・ 女性が会議にいない（少ない）のも（ダイバーシティという観点から）どうなのか。

【地域の各主体の交流】

- ・ 会津短大・会津大学を地域で活用しきれていない感がある。ICT オフィスも含め、つながりができれば。
- ・ どこがどうつながっていくかわからない。引き出しが多い地域でありたい。
- ・ ICT オフィスは ICT 分野が中心であるが、それだけではない。交流施設などがあるのだから、敷居が高い印象を薄めていけるよう、地域との人材交流を図っていければ。
- ・ 市内の中学校から直接 ICT オフィス内企業へのインターンシップの申し入れがあったと聞いている。
- ・ ICT はコンテンツが異なれば、進む方向性も異なる。会津の土台（地域課題等）にアプローチ・注目してもらえれば。
- ・ 地域の技術や資源を地域企業が活用するということが有意義だと思うが、活用状況はどうか。
- ・ 誰が何をやっているのかが不明瞭。地元企業のシーズ・ニーズがわからない。本業とは別だけど、頼まれればこんなことも出来る、という事業者も多い。
- ・ 地域内での企業連携が進めば、地域独自の新しいサービスや技術等が生まれるのでは。
- ・ 技術やサービスを調べるのはネットが中心である。そのため、ヒットしやすい発信をしていない地域企業には目がいかなくなってしまう。灯台下暗しとなることがある。
- ・ 自分を発信する術が少ないのか。意外と地域企業から地域企業に対する発信が弱い。

- ・当たり前の技術や仕組みであるからこそ、発信できないことも少なくないと思う。こちらの業界では当たり前のことが、あちらの業界で求められていたりすることもあると思う。
- ・じかにヒアリングしていくことが近道か。データを集め、データベース化するのは人がやり、マッチングは ICT 技術を使う、といったすみ分けができるとうまい。
- ・地域企業の技術・サービスにおけるシーズを広く把握している調整役がいれば、マッチングはすすむのだろうが。
- ・企業と地域（地域課題等）のマッチングも必要か。
- ・仕事は仕事でとってくる姿勢が大事。大企業や最終小売業者ほどビジネスライクとなっている。
- ・ネットで横並びの比較をされる時代である。隣近所の付き合いよりもネット。
- ・BtoB が主の事業者は C を、BtoC が主の事業者は B をより意識していく必要がある時代。商売の幅を広げるためにも必要だと思う。商人気質を高めていかないと。
- ・学生のワークでもイメージしやすい BtoC に意識が行きがちである。

令和元年度
会津若松市中小企業・小規模企業未来会議 コアメンバー

所属・企業名		役職	氏名（敬称略）	備考	第2回 出欠
会津大学短期大学部 産業情報学科		准教授	青木 孝弘		出
中小・ 小規模 企業者	松浦商事 株式会社	代表取締役専務	松浦 健典	会津若松商工会議所 推薦	欠
	渡部電気工事店		渡部 由美子	あいづ商工会 推薦	欠
	株式会社 三義漆器店	代表取締役	曾根 佳弘	県中小企業家同友会 会津地区 推薦	出
	TAKLAM	代表	遠藤 和輝	公益財団法人 会津青年会議所 推薦	出
支援 機関	会津若松商工会議所	中小企業相談所長	長谷川 剛		出
	あいづ商工会	事務局長	福島 正博		欠
	福島県中小企業団体中央会 会津事務所	専門指導員	江川 佳伸		出
	会津信用金庫	本店営業部長	渡部 勝敏		出
	会津商工信用組合	営業統括部部长	武田 義幸		欠
会津若松市観光商工部商工課		課長	長谷川 陽一		出